

第三者のコメント

一読して深く印象に残ったのは人々の表情であり、人々の声である。現代の日本では非常に多数のCSR報告書が発信されているが、これほど多くの人間が登場する報告書に接した経験はない。「海・山・大地のために」のタイトルどおり、なによりも農村・山村・漁村の現場で汗を流し、知恵を絞り、家族・知人を思う人々からのメッセージがぎっしり詰まっている。昨今、「現場の声」や「現場の宝」といったフレーズが、ともすれば決まり文句のごとく使われる傾向も目につくが、この報告書からは飾るところのない人間の営みの尊さを汲み取ることができる。

多くの人々という意味では、農林中金で働く職員も数多く登場する。これもCSR報告書としては珍しい。ただし、この点にもある種のポリシーが感じられる。それは、登場する職員の大半が人事交流のもとで切磋琢磨する若手や中堅というところに現れている。具体的には地域から農林中金への出向・研修者、そして農林中金から地域への出向職員が紙面に登場する。後者には東日本大震災の被災地で働く農林中金の職員も含まれる。これらの職員の仕事に光をあてるところから、現場との双方向の交流を通じた人材育成への熱意が伝わってくる。永続的なCSRの源泉は人づくりにある。

今回の報告書は、広く社会に発信されるメッセージであるとともに、農業・水産業・林業に関わる人々にとっても、貴重なコミュニケーション・ツールとして役立つに違いない。農業者やJAの役職員がこのレポートに目を通すとき、遠く離れた地域にも仲間がしっかり根付いていることに勇気づけられるであろう。水産業しかりであり、林業もしかりである。大切なのは、登場する人々がスーパースターではないというところにある。ちょっとしたアイデア・工夫と長持ちする頑張りで一步先んじている点に、現地からのレポートの共通項がある。自分たちの手の届くところにある先駆的な取り組み。農林水産業の領域でこれに勝る先生はいない。

農林中金のCSR活動の特徴は、その多くが縁の下の力持ちの役割に徹しているところにある。出資・助成や利子



名古屋大学大学院
生命農学研究科教授
しょうげんじ しんいち
生源寺 真一氏

負担の軽減といった手法がとられているからである。また、CSRと本務とのあいだに明確な線を引くことも案外むずかしい。農林水産業そのものが、人間にとての必需品を切れ目なく産出するとともに、地域社会の環境形成に貢献している点で、いわば本務と社会貢献が一体化した営みだからである。そして、このことは農林中金のCSRのもうひとつの持ち味につながっている。

それはCSRの取り組みの多くが継続的であり、長期の視野から発想されていることである。平成25年度が対象の報告書ではあるが、継続的な活動が少なくない。むしろ、短期の取り組みは例外的だと言ってよい。また、ひとつの活動が終期を迎える場合、別の発展型に引き継がれるケースもある。今回の報告書で言うならば、FRONT80(森林再生基金)が農中森力基金へとかたちを変えることになった。農林水産業は長期もしくは超長期の時間軸で営まれる産業である。目下のCSRの恩恵を享受するのが次の世代というケースも念頭に置く必要がある。

紹介は最後になったが、東日本大震災からの復興の取り組みに前年度を上回る16ページを投じている。被災地に関する概略的な情報は他の媒体からも得られるが、ここでも人間中心の編集方針ならではの生きた情報に出会うことができた。なかでも、資金需要が緊急対応から生産施設へ、さらに生活・住宅へとシフトする状況と、これを踏まえた農林中金の具体的な支援策の年次展開の記録が印象的であった。